

道博協ニュース

第21号

発行所 北海道博物館協会
事務局 札幌市白石区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-(898)-0456

第35回全国博物館大会を終えて



本年の博物館大会は、第二
十回大会を札幌で行って以来、
十五年振りの北海道での開催
となった。十五年前の北海道

は、現在道内博物館の中心と
なっている開拓記念館が開催
した翌年にあたり、日本全体
が高度経済成長に併せて博物
館ブームが到来し、毎年百館
を超える博物館が開館した頃
であった。そして今回は、昭
和六十一年に創立五十周年を
迎えた伝統ある釧路市立博物
館で開催となり、北海道博物
館協会並びに釧路市立博物館
の方々の絶大なご協力を得て、
全国から二百五十名の参加者
を迎えて行われた。

時あたかも釧路湿原が国立
公園となり、釧路市立博物館
の館長以下全職員が一九とな
って、博物館を中心に釧路付

近の自然の調査研究を行うと
ともに、地域住民を始め道内
及びこの地を訪れる人々と共
に、関係機関に対しても、自
然保護について積極的に普及
啓蒙に務め、その集大成が同
湿原の国立公園承認となった。
同館職員は勿論のこと、市民
全部が喜びに包まれている最
中の大会開催であった。

本年は「博物館を巡る環境
と博物館が作り出す環境」の
テーマの下に、四分科会に分
かれて六時間に亘る熱心な討
議が行われた。

八月に最終答申を終えて、
その役目を終了した臨時教育
審議会では、生涯学習社会を
目指して、博物館がその重要
な役割を占めること、及び実現
のため諸施設・設備を充実さ
せることが不可決であると述べ
ている。また政府は、地方活性
化対策を急ぐように全国各地
の自治体を指導しており、地
域振興対策として文化発展も
大きな要素の一つとなった。

このように内外ともに時宜
を得たテーマに参加者の討議
も非常に熱がこもり、六時間
があつたという間に過ぎたとい
う感想も聞かれた。部会は、
人文系と自然系に分かれ、さ
らに、それぞれを大規模館と
中小規模館の四部会に分かれ
ての討議が活発になされた。

結論的には、各部会とも共
通した問題点が出てきた。即
ち、先ずこれからの博物館は、
与えられた自然環境、社会環
境が良好であれば、これを積
極的に活用することは勿論で
あるが、良好でない場合は、
これを逆に利用する、例えば
山間僻地にある自然系博物館
は、交通不便のために入館者
が少なくなるが、自然環境に
恵まれていると捉え、地域特
性を採り入れて特色ある博物
館として、地域の人々だけで
はなく、観光客の誘致にもつ
ながるような自然を紹介する
と共に、そこでしか見られな
いような展示、あるいは体験
をさせることができる博物館
にする、また歴史系博物館で
あるならば野外博物館のよう
に建物の移築等により文化財

保護と共に、展示公開による
普及活動や、ある時代のその
地域の町並を再現して体験さ
せるなど、今後は入館者の漸
減の理由を考えるのではなく、
単に行政単位のみではなく、
広く考えることが是非とも必
要であると議論されている。

さらに、現行の博物館法の
問題がでてきており、県市町村
あるいは私立、国立また教育
委員会、知事部局などを問わ
ない法律の下で、地域毎に各
博物館が文化的社会を築きた
めに共通理念を立て、それぞ
れ役割分担を行い、各博物館
が協力しながら、相乗効果を発
揮して生涯学習社会の建設に
向かって、積極的に努力して
いきたいという誠に頼もしく、
活気に充ちた結論となった。

非常に価値ある大会であつ
たと思うと同時に、今後の日
博協の果たす役割もますます
重くなるようであり、責任を
再認識いたしておる所である。

今後共、関係各位のご協力
を賜りたいと願いつつ、第三
十五回全国博物館大会を終え
ての言葉といたしたい。

財団法人 日本博物館協会
専務理事 毛利正夫

財団法人 日本博物館協会
専務理事 毛利正夫

財団法人 日本博物館協会
専務理事 毛利正夫

財団法人 日本博物館協会
専務理事 毛利正夫

第35回日博協全国大会に参加して

釧路生れの私にとって釧路の秋は最も好きな季節である。その十月に釧路での全国大会に参加を楽しみにしていたひとりであった。三十年ぶりの二度目の釧路大会、道内でも五度目の全国大会はまさに博物館活動の北海道パワーの一面ではなからうか。

同じ道東に住む者として以前から釧路の沢館長さんにお手伝いを申しあげていたところであるが、沢館長さんのご配意で大会の裏方のひとりに加えていただいたこともうれしいことであった。私自身、初めての全国大会参加であったが、何よりも気になっていたのは、やや抽象的ではあるが大都会テーマの「博物館を巡る環境と博物館が作りだす環境」であった。

時あたかも釧路湿原を中心とした話題の中で北海道の大自然を背景に博物館活動について論じ合うことはタイムリでもあり、これからの博物

館のあるべき姿の指標としての大きな意味を含んでいたのではないだろうか。

只、率直な感想ではあるが、四つの分科会の構成に今後検討の余地があるように思えた。施設の規模別、人文系、自然といった一応の分類ではあるが、その大枠な構成に参加者も少々戸惑いもあったように見受けられた。

一方、他の社会教育施設と異なるのはひと口に博物館と云っても人文系、自然系の中にもいくつかの機能に分れる面、更には民間の運営、第三セクターの運営、公立でも国立、県立、市町村立の運営など多岐にわたっての中で大会参加者が一堂に集っての討議はかなりむづかしい問題ではあったかと思う。

しかし、反面そうした複雑な構成の中だからこそ、研修になった点も多々あったことは見逃せないことであった。私が参加した第四分科会での



ことであるが、参加者の中に女子の大学生が幾人かいたのであるが、当然学芸員コースの学生であろう。大学で学んでいる博物館像と現実の博物館像があまりにもギャップが大き過ぎるという意見、感想であった。このことは大学における学芸員の養成に問題があるとの意味にも受けとめた次第である。反面、どっぴりと博物館にうずまわっている私達にとつても新鮮に聞こえた声であった。

また、民間運営の博物館の方々にも今、博物館がどう生きるか、つまりサバイバル時代をどのようにクリアしていくかという悲痛とも云える意見も印象的であった。博物館本来の機能を果しつつ、一方で運営というよりは経営といたったきびしい諸条件の中でどのように生きのびていくかという切実な現状をうったえていたことに参加者一同熱心に耳を傾けていた。このきびしい現実を公立の私達がどのように受けとめるべきは大切なことのように思った次第である。

同時に公立、民間を問わず博物館における職員の意識の問題など二日間にわたり六時間というロングランの分科会は迫力のあるものであった。こうして秋晴れの下で二日間の釧路での全国大会は幕をおろしたのであるが、私はこの二日間の釧路大会を通じて痛感したことは博物館という最も伝統のある社会教育施設が他の社会教育施設の活動に共

にどのよう地域に密着し、生涯教育、学習時代にその役割を位置づけ、生きた活動として進むべきかであった。まさに公立、民間博物館がどのようにに生きのびていくかである。

（北網圏北見文化センター）
館長 平井 正史

昭和六十二年度

日本博物館協会顕彰者

日博協顕彰規程に基づき、次の方々が顕彰されました。

〈規程一号〉

佐藤昌人（苫小牧市科学センター）

橋本正雄（釧路市立博物館）

紺谷憲夫（北海道開拓記念館）

中田幹雄（ ）

海保嶺夫（ ）

〈規程二号〉

片岡新助（元釧路市立博物館）

昭和六十二年度 研究会・研修会報告

科学館職員研修会

「プラネタリウム特別投影の種類と演出について」

八月二十八日、二十七日、旭川市青少年科学館と、北海道旭岳温泉を会場に、北海道青少年科学館職員研修会が、開催されました。苫小牧、釧路、室蘭、帯広、稚内、札幌、小樽、千歳、旭川の9館からの参加がありました。

まず、北海道青少年科学館連絡協議会会長、続いて、開催地の旭川市教育委員会から社会教育部長のあいさつがありました。

その後、直ちに、当館で今



得るため、さまざまのプログラムが企画されています。『プラネタリウムコンサート』も、ポピュラーなものになってきています。最近では、生演奏を行う館が増えています。その反面、音響効果の悪さから、中止した館もあるようです。この他、『プラネタリウム寄席』、『レーザーショー』等について紹介がありました。当館では、開館当初行っていた「夜間投影」を今年再び、実施したことを報告しました。天文台で行っている「天体を見る会」(PM七:三十一)の前の時間帯(PM六:〇〇-七:〇〇)に行いました。天候は悪かったのですが、通常より幅広い年齢層の利用がありました。

このあと、実験実習活動について、それぞれ独自の事業が、各館から紹介されました。どの館でも、参加者の減少がめだつてきていると、報告がありました。

さらにこのあと、当館の職員を指導員に、木工作「レタラックの製作」を行い、会場を旭岳へと移しました。二十七日は、前北海道旭川教育大教授佐藤正三先生を講師に、旭岳の動植物の観察会が行われました。

事務吏員 沖館紀子

日本動物園水族館協会 北海道ブロック 飼育技術者研究会

〈春季研究会〉

日動水協道ブロックでは加盟十一動物園水族館飼育技術者を対象に技術向上を目的とし、研究会を開催している。

同研究会では研究成果の発表と技術交流が行なわれており、春季飼育技術者研究会は六月二十六、二十七日の2日間、帯広市動物園で開催した。今回は十九名の参加により、十題の研究発表とサマースクールの共通テーマとした意見交換が行なわれた。演題名は次のとおりです。

- (一) ボウズギンボについて (広尾水族館)
- (二) 水槽内におけるエラブ ウミヘビの産卵について (サンピア水族館)
- (三) アムールトラにみられたネコカリシウィルス感染症について (旭山動物園)
- (四) ヒグマの体温について (登別クマ牧場)
- (五) ワオキツネザルの人工授精について (帯広市動物園)
- (六) フラミンゴの繁殖について (円山動物園)
- (七) オジロワシの繁殖について (釧路市動物園)
- (八) アザラシショーの展開について (小樽水族館)
- (九) スクイズケージの改良について (登別クマ牧場)
- (十) 円山動物園における有害鳥獣(特にキツネ)対



策と今後の課題について
(円山動物園)

(二) 動物園の教育活動につ
いて (旭山動物園)

・研究会共通テーマ、
調査報告「サマースクール」
について (帯広市動物園)

なお、次期研究会の共通テ
ーマは「保定について」と題
し、各園館で開発されたユニ
ークな動物保定法の技術交換
を行なうことが決められた。
(帯広動物園)

技師 阿部 彰一
〈秋季研究会〉

昭和六十二年九月十七、十
八日の二日間にわたり、稚内
市立ノシャップ寒流水族館を
会場に秋季飼育技術者研究
会を開催しました。全道十一
の全園館から十六名の飼育者
が出席し、熱心に研究発表・討
議がなされました。「ホッキョ
クグマのベアリングについて」
旭山・深坂、「チンパンジー
の特異な性皮腫脹と出産」円
山 明石、「リス小屋の新築に
ついて」登別 松島、「タン
チョウの自然ふ化について」
釧路 田中、「ホッケの産卵行

動について」ノシャップ 東、
「ネズミイルカの飼育につい
て」室蘭 相内・広尾 本田、
「エゾタヌキの亜鉛欠乏症と
思われる症例について」旭山

坂東、「サル類の鉛中毒発症例
について」円山 向井、「ホカ
ケアナハゼの産卵と卵発生の
経過」オホーツク 渡辺、「シ
ベリアヘラジカの飼育・繁殖
について」帯広 清野、「小型
海獣類の保定器について」小

樽 本間、以上十二題の発表
が行なわれましたが、いずれ
も日頃の飼育作業の中での観
察、研究の積み重ねから生ま
れた貴重な発表でした。また、
その後の活発な質疑応答によ
り、さらに充実した成果が得
られたように思われます。共
通テーマでは「動物・海獣の
保定法」について討議され、
各園館の現状や工夫を凝らし
た方法や器具の情報を交換し
ました。飼育上危険かつ動物
にストレスを与え困難な作業
のため、今回の討議は貴重な
資料になるはずで

かに情報交換や互いの交流を
深めることができました。翌
日、稚内市の施設を見学し、
有意義で充実した研究会を終
えることができました。
飼育者の技術向上と各園館
の交流が一層深まるよう、当
研究会がさらに発展していく
ことを願っています。
(ノシャップ寒流水族館)

技師 東 政史

学芸職員研修会

「既存施設利用による博物
館建設」をテーマに、標題の
研修会が九月二十五・二十六
日、歴史とロマンのマチ小樽
市で開催されました。

第一日目は小樽市博物館の
主任学芸員土屋周三氏による
「石造倉庫の再利用による博
物館づくり」と題した発表が
あり、旧小樽倉庫を利用した
博物館建設の経過と問題点が
報告されました。つづいて、
八月二十六日、学芸職員部
会が実施した「シベリア極東
地区博物館視察研修」につい
て、事務局長の金盛典夫氏か
らスライドで報告されました。
その中で印象的なこととして、
教育活動に主眼を置き一般市

民の利用が高いことがあげら
れました。昼食後、美術館・
文学館を見学し、午後からは
「既存の建物を再利用するた
めの技術と法律」について、
建築の専門家の眼から見た種
々の問題が提起されました。
特に建築基準法・消防法など
の法的な規則・復元するため
の技術や資材の問題などが指
摘されました。既存の建物を
再利用することの難しさを改
めて痛感しました。研究協議
終了後、論議の中心となった
小樽市博物館を見学、夕やみ
せまり小雨が降りしきる中を
ロマンチックな詩情がただよ
う小樽運河を散策し、北一硝
子へと足を運びました。

第二日目は、当地の新鮮な
味覚を心ゆくまで味わった
めか、その余韻を残しつつ、
新装なった旧日本郵船小樽支
店(国・重文)を訪ずれまし
た。西洋の城を彷彿させる頑
強なたたずまい・豪華金らん
たる室内装飾に感嘆し、しず
か号のまつ北海道鉄道博物館
に向いました。北海道の開拓
の原動力となったS・Lを見

学、再会を誓い、新たな決意
を胸に秘めて散会しました。
今回の研修会には、各館秋の
事業を控えているにもかかわらず三十一名もの参加があり、
例年になく盛会で実りの多い
ものでした。最後に小樽市博
物館の皆さんに衷心より御礼
申し上げます。
(富良野市郷土館
学芸員 杉浦 重信)

広域共同事業

「ヨーロッパ近代彫刻の巨匠
たち展」を実施して

両の手指はまるでそこに目
があるかのよう、ブロンズ
像の曲線上を動いてゆく、「先
生、彫刻って固くて冷たいと
思ってたけど、ずいぶん滑ら



かで温い感じだね。ロダンの作品に触れて胸がドキドキしました。これは、展覧会場を訪れた目の不自由なひとりの女性徒が感動して思わずもろした感想である。こうした光景を会場内で見るにつけ、あ、やって良かった、今まで苦勞してきた甲斐があったんだと胸が熱くなる思いであった。

本年十月、帯広市教育委員会と帯広市民劇場の共催で標記展覧会を実施した。情報・資料の収集から始まって、計画立案をして実施に至るまでに一年以上の時間をかけた事業であったが、さまざまな意味において、今後の事業の組み立て上、参考になることが多く、紙面の関係もあるのではその一部を所感をまじえて紹介をしてみたい。

一般に、彫刻展は人々に馴染みがうすく、地方の小都市で収支のバランスをとった事業として成功させることが非常に難かしいものひとつと言われる。一般家庭で絵を飾っているのはよく見かけるが、

彫刻を置いている家庭が本場に少ないことからしても納得のゆく話しではある。彫刻を鑑賞する機会を提供することは、地域の教育文化の向上をはかるうえで大きな意味あいを有つものであるが、絵画展のように良い作品群で展覧会を構成すればまずは左団扇というわけにはゆかないところに彫刻展の難かしさがある。

しかし、まずは質の高い作品をそろえて、できるだけ多くの人々を会場に引きつけるよう努力することが大切である。そのためにはそれなりの経費も必要となるもので、数年前、ゴッホ展を模索したときには、一会場一千五百万円で複数の会場で実施するのが前提条件と企画元に言われて途方にくれた思い出がある。そうしたものである。今般の彫刻展についても、ロダンの彫刻展についても、ロダンの彫刻展に匹敵する魅力あふれた作品群で展覧会を構成し、事業として十分に成り立つ条件を整えようと東京の企画元と精力的な折衝を行ったが、良い作

品を所望すればさらに開催料が上乗せされるのは閉口した。最終的な開催権料が見えて来たときにはさらに頭をかかえざるを得なかった。とも人口二十万人に届かぬ帯広市のような小都市で総事業費二千五百万円を超える彫刻展を組立てる目的が立たなかつたわけである。ならば、帯広市を加えて道内の複数の都市が共同事業として連携し開催料を折半するしかないわけである。思いあまつて、昨年九月、道内行脚に出たが、幸い、事業の趣旨に賛同された稚内市と北見市が共同事業に加わっていただくことができた。この吉報を聞いたとき

品を所望すればさらに開催料が上乗せされるのは閉口した。最終的な開催権料が見えて来たときにはさらに頭をかかえざるを得なかった。とも人口二十万人に届かぬ帯広市のような小都市で総事業費二千五百万円を超える彫刻展を組立てる目的が立たなかつたわけである。ならば、帯広市を加えて道内の複数の都市が共同事業として連携し開催料を折半するしかないわけである。思いあまつて、昨年九月、道内行脚に出たが、幸い、事業の趣旨に賛同された稚内市と北見市が共同事業に加わっていただくことができた。この吉報を聞いたとき

品を所望すればさらに開催料が上乗せされるのは閉口した。最終的な開催権料が見えて来たときにはさらに頭をかかえざるを得なかった。とも人口二十万人に届かぬ帯広市のような小都市で総事業費二千五百万円を超える彫刻展を組立てる目的が立たなかつたわけである。ならば、帯広市を加えて道内の複数の都市が共同事業として連携し開催料を折半するしかないわけである。思いあまつて、昨年九月、道内行脚に出たが、幸い、事業の趣旨に賛同された稚内市と北見市が共同事業に加わっていただくことができた。この吉報を聞いたとき

品を所望すればさらに開催料が上乗せされるのは閉口した。最終的な開催権料が見えて来たときにはさらに頭をかかえざるを得なかった。とも人口二十万人に届かぬ帯広市のような小都市で総事業費二千五百万円を超える彫刻展を組立てる目的が立たなかつたわけである。ならば、帯広市を加えて道内の複数の都市が共同事業として連携し開催料を折半するしかないわけである。思いあまつて、昨年九月、道内行脚に出たが、幸い、事業の趣旨に賛同された稚内市と北見市が共同事業に加わっていただくことができた。この吉報を聞いたとき

のとして地域住民に受け入れられるよう、事業実施に向けた大義名分を掲げ、それを多くの人々に訴えて快くチケットを買ってもらう環境を作らねばならない。こうした課題を多くの市民と知恵を寄せあつてひとつひとつ解決し乗り越えていった。本事業の成功はこうした積み上げにあつたように思える。

本年九月に稚内市の総合文化センターで開催された標記展覧会には五千人を超える人々が会場を訪れ、北辺の地で初めて開催された秀れたヨーロッパ近代彫刻の数々を心ゆくまで鑑賞され、地域に大きな感銘を残したと聞く。また、続いて開かれた帯広会場には

のとして地域住民に受け入れられるよう、事業実施に向けた大義名分を掲げ、それを多くの人々に訴えて快くチケットを買ってもらう環境を作らねばならない。こうした課題を多くの市民と知恵を寄せあつてひとつひとつ解決し乗り越えていった。本事業の成功はこうした積み上げにあつたように思える。

二万七千人を超える人々が訪れ、十一月には作品を北見市の北網園北見文化センターに移して展覧会が開催された。ここでも一万人を超える地域住民が鑑賞された。いずれのまちにおいても会場を訪れた人にとっては、一生の思い出のひとつとなつて心に残つたことと思う。

地域の教育文化の向上をはかるためには、継続性のある地味な事業もあり、また一方、地域に刺激を与えるイベントを組立てることも必要である。最近では質の高いものでなければ関心を持たれない状況になつてきているだけに必然的に事業経費も大きくならざるを得ない。これからは、道内各都市が常に情報と人的交流を心がけ、連携しうるものは広域共同事業として組み立て、より質の高い事業を地域住民に提供しようとする姿勢こそが大切であるように思う。あな

ののまの耳よりな情報があつたら、ぜひ聞かせて下さい。(帯広百年記念館 文化課長 後藤 聡明)



館園紹介

苦前町郷土資料館

苦前町郷土資料館は、昭和五十九年三月一日に開館しました。建物は、昭和三年に建築された旧役場庁舎を改装、転用しているため、正面ポーチ、体験学習室の上げ下げの窓、応接間（旧町長室）などに大正時代の洋風建築様式の格調の高さと、風格を残しています。当館の目的は、苦前町の歴史に関する各種の資料を調査、収集、保存、展示して一般に公開するだけでなく、教育、学術、文化の向上に寄与すること、開拓以前の苦



前の生いたち、アイヌの人々の生活文化、現在に至る歴史の経緯をわかりやすく解説しています。種類としては、自然環境資料、先史時代の文化資料、生活、風俗、産業、生産技術資料、交通運輸通信資料、古文書、記録などですが、展示内容で特記したいのは、大正四年、苦前市街地から約三十キロメートル奥の三毛別御料地、六線沢で冬眠を逸した一頭の熊（推定350kg）が、カヤや笹ぶきの開拓小屋を次々に襲い、七人を殺害、三人に重傷を負わせるという獣害史上最大といわれる熊事件——苦前熊事件——のジオラマで、

今も館を訪れる人々の足を釘づけにし、町民に開拓の悲話として語り伝えられている事件の再現です。当町は昔から熊が多く、狐や狸などが出没し、開拓の苦難の歴史は獣との闘いでもあったことから、当館には昭和五十五年にとらえられた体重五百キログラム（十八才、オス）という全道一の熊「北海太郎」、一昨年三浜でとらえられた三百五十キログラム、（六才、オス）の「溪谷の次郎」を展示、正面玄関の木立ちの中から、来館者を迎えます。この様な熊との関わりから、昨年、一昨年の二回（七月・八月）、ヒグマの生態と人々のくらしに焦点をあてた「特別展・ヒグマ」を開催、期間中だけで、道内外から七千人以上の観覧者が訪れました。現在も、生態、冬ごもりの様子、生活、食べ物、共存への問いかけなど、熊に関する資料が展示されています。今年度の特別展では、当町内で昨年から発掘されている香川三線遺跡にスポットをあて、旧石器時代から擦文

時代に至る歴史的経緯の説明や、土器、紡錘車などの埋蔵物、擦文時代の住居模型などの展示をしました。又、海から拓けた苦前を偲ぶ漁業の様子は、ヤン衆の沖上げ音頭の流れる中、力登漁場がジオラマで再現されていて、ひとかかえもある大浮玉、風呂釜を思わせるニシンの粕（肥料）たき用大釜、うろこのにぶい光もそのままの背負いもっこ、建網船の材を山から伐り出す時に使われた修羅などと共に、ニシン漁にわく往時の情景を思いおこさせてくれることでしょう。当館には、体験学習室があり、来館者が自由に糸紡ぎ、俵編み、わら細工、石

白を使つての粉ひきを体験できるほか、竹とんぼ、お手玉、紙風船、バッチ、ガツバ、竹うま、輪まわしなどで遊び、町内の小中学校の郷土学習の一環として、これらの遊具作りのほか、わら細工、昔の食物、おやつ作り、古老の話を聞く会を通して、先人の知恵にふれ、工夫と忍耐の生活を伝える学習の場にご利用されています。



《苦前町郷土資料館案内》
所在地・078-137 苦前郡苦前町字苦前三百九十三番地
電話番号・〇一六四六—四二九五
開館時間・十時～十七時
休館日・毎週月曜日と、十一月十一日から翌年四月三十日迄（特別展期間中は休館日なし）
入館料・一般高校生二百円、小中学生百円、団体十名以上三割引
交通・沿岸バス停、小学校通り・上町。下車徒歩七分。
（苦前町郷土資料館 館長 齊藤 浩正）

館 園 紹 介

北海道行刑資料館

明治維新後、全国では明治七年の佐賀の乱から始まり、十年の西南の役に至る内乱によって多くの国事犯・重罪犯が一度に生じた。

政府は、これらの対策に、「北辺の未開の地に流徙刑の囚人を送りこみ、政府に抗する危険分子を隔離し、確實、安価な労役を駆使して開拓に当らせ、農耕により自給自足の生活をさせる。さらに人口稀薄な北海道に自立更生させたものを定住させる」といった一石三鳥の目的のもと、明治十四年九月、石狩川右岸の名も知れない未開の地、シベツプト（現在の月形町）に樺戸集治監を設置した。

この集治監も三十九年の歴史をもって大正八年廃監となった。北海道行刑資料館は、明治十九年建立の樺戸集治監本庁舎をそのまま使用したもので、木造平屋建て、四八〇㎡の洋風建築物で、和洋の手法を混

交した建築として注目され、文化財的価値は極めて高いと言われています。また展示資料は樺戸集治監の資料を中心に、道内外の矯正資料と開拓のようすを知る貴重な資料六百点を集め公開している我が国唯一の行刑資料館です。

本館は昭和五十年、一般に公開してから二十五万人程の入館者を数えています。本館に展示している主なものを紹介しますと、
○初代樺戸集治監典獄、月形潔氏の遺品
○当時、囚人に戒具として使用した鉄丸・連鎖・手錠等。
○徳隣巖秘録の藩政時代の刑罰図
○江戸時代に罪人を捕えるため用いた袖捕
○樺戸集治監に布設した上水道用木管
○囚人の着用していた赤い囚人服

など囚人の使用した物、囚人の作成した物が数多く展示されています。

また、当時数多くの囚人がこの樺戸集治監に送られてきました。名を馳せた者も多く中でも「五寸釘の寅吉」は開監時からの囚人で放火・殺人の凶悪犯。3回も脱獄した脱獄の名人で、この際、五寸釘のついたコッパを踏みそのま

ま三里も走って逃げたためこの名がついたと言います。七十二才で放免になり、後に自分のざんげ話を聞かせて歩く興業師になりました。
ちよつと変わったところで熊坂長庵がいます。彼は文化因とでも言うのが適当でしょう。明治十二年の藤田組ニセ札事件の犯人として捕えられ集治監に送られました。医師兼画工の彼はその後も仏

画等を残し、その作品は本館に所蔵されています。病身の彼は集治監に送られてから二年後に獄死。出身地神奈川県では、冤罪と今も調査を進めています。

明治の鼠小僧こと根谷新太郎は関東一円を荒し回った窃盗犯。樺戸に護送のとき情婦を同伴させたほどのつわものとして知られています。

その他には、六尺の長身で一日に四十八里も走ったというほど足の速かった稲妻強盗、その非道ぶりは浪花節にも語られている海賊房次郎、スリの大親分の玉木勘四郎、ここを脱獄し戸籍を偽り、某村の村長にまでなった近藤徳延など数多くの有名囚が服役して

ました。また本館では、ビデオの上映も行っており、樺戸集治監と月形町の歴史が一目でわかるようになっていきます。

本資料館は歴史を中心とした社会教育の場として、各世代の人々が楽しみながら知識を広める一施設として内容の充実を力を入れていきたいと思えます。

（北海道行刑資料館案内）
所在地061-05 樺戸郡月形町 一二一九番地
電話番号・〇一二六―五三一―二三二一
開館時間・九時―十六時三〇分
休館日・十一月二十四日―四月二〇日（開館中は休館日なし）
入館料・大人（高校生以上）一五〇円、大人団体（一〇名以上）一二〇円、小人（小学生）五〇円、小人団体（一〇名以上）三〇円
交通案内・札沼線石狩月形駅下車徒歩五分

（月形町役場企画振興課）
主事補 加藤 弘光



館 園 動 向

◆美幌博物館が開館

長く町民に親しまれてきた

郷土資料館から発展した形で、

昭和六十二年十月十二日、美

幌博物館がオープンしました。

同博物館は美幌農業館と合

築の施設で、総展示面積は千

三百七十八平米あります。博

物館では「川と人間」をテー

マに、美幌の地形・地質、考

古、アイヌ民族の生活・文化、

動植物の生態、開拓の歴史等

について、実物資料や模型資

料を用いて紹介しています。

農業館では、美幌農業の現状

と未来像について映像資料を

中心に展示を行っています。

所在地・網走郡美幌町字美寓

二五三―四

電話番号・〇一五二七―二一

二一六〇

開館時間・午前九時三十分か

ら午後五時

休館日・毎週月曜日、毎月末

日、国民の祝日(五、十月

を除く)、年末年始(十二

月三十日、翌年一月六日)

入館料・大人三百円、高・大

生二百円、小・中生百円、
団体二十名以上は二割引

(美幌博物館)

学芸員補 宇野 裕之

◆北方歴史美術館オープン

本会会員妻沼浩氏が準備し

て来た北方歴史美術館が10月

3日、北見市大町30に開館。

書画・彫刻・古地図・絵図・

古文書・民俗・民族資料など

貴重な歴史資料が展示され、

民芸喫茶レストラン明治館が

併設されています。

◆釧路市立博物館に北海道

新聞社会文化賞

釧路湿原調査など地域の自

然・文化財の保護と普及に貢

献した釧路市立博物館に、11

月7日、道新社会文化賞が授

与されました。贈呈式には道

博協から渡邊会長が出席しま

した。

事務局日誌

8・14 道立近代美術館開館

十周年記念式典出席(事務

局関)

8・20 日博協会長宛に第35

回全国博物館大会共催承諾

書発送

8・25 小樽市博物館長に昭

和62年度学芸職員研修会開

催につき協力依頼状発送

8・30 第27回北海道博物館

大会開催につき、市立函館

博物館(玉地庶務係長)と

現地協議

8・30 昭和62年度学芸職員

研修会案内状発送

9・6 昭和62年度日博協顕

彰者確定について関係館長

に通知文発送

9・25、26 学芸職員研修会

開催(於小樽市)

9・16、18 道教委主催、博

物館・郷土資料館等職員研

修講座開催(於道立教育研

究所)

10・2 事務局会議(全国博

物館大会について)

10・3 道博協ニュースNo.21

原稿執筆依頼状発送

10・6、7 第35回全国博物

館大会開催(於釧路市、事

務局関・三野・中田実行委

員として参加)

10・13 道教委教育長に昭和

63年度北海道博物館大会補

助金申請書類提出

道生活環境部生活文化課に

全国博物館大会協力に対す

る謝礼のあいさつ(事務局関)

10・13 網走市立郷土博物館

長、網走市教委教育長来訪、

網走管内博物館連絡協議会

研修会・62年度北方民族文

化シンポジウム開催につき

共催依頼あり(会長・事務

局面談)

10・22、23 道社会教育協会

創立十周年記念大会、札幌

市道庁別館で開催(事務局

長参加)

11・7 釧路市立博物館、道

新文化賞授賞(会長贈呈式

に出席)

11・11 市立函館博物館と第

27回北海道博物館大会開催

につき協議

11・17 函館市長宛に第27回

北海道博物館大会開催につ

き協力依頼状発送

11・26、27 網走管内博物

館連絡協議会研修会開催(於

北網圏文化センター、関出

席)

け科学館(札幌市南区真駒内
公園二番一号)

退 会 会 員

〈団体会員〉大雪観光史料館

(上川郡上川町栄町四十番地)

帯広畜産大学環境畜産学研究

所生物部(河東郡上士幌町宇

糠平)

〈個人会員〉藤井勇吉(前道

立近代美術館勤務)

お 知 ら せ

北海道フィンランド協会主

催、道博協等後援の博物館見

学を主目的とする「早春のフ

インランドヘルシンキ・ラ

ップランド」と北欧・パリ見

学ツアーが企画されており

ますのでご案内いたします。

日時 昭和六十三年三月八

日、同年三月二十二日

募集人員 二十名

費用 約五十万円

申込・問合先 北海道フィ

ンランド協会、電話〇一

一一二七一〇八六四

新 入 会 員

〈団体会員〉札幌市豊平川さ